



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	帯谷知可『ヴェールのなかのモダニティ -ポスト社会主義国ウズベキスタンの経験-』東京：東京大学出版会，2022年，v+255+27頁
Author(s)	菊田，悠；KIKUTA, Haruka
Citation	日本中央アジア学会報，18，69-75
Issue Date	2022-07-31
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/jacas.18.69">https://doi.org/10.14943/jacas.18.69</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/91606">https://hdl.handle.net/2115/91606</a>
Type	journal article
File Information	JB18_017kikuta.pdf



帯谷知可『ヴェールのなかのモダニティ  
——ポスト社会主義国ウズベキスタンの経験——』  
東京：東京大学出版会、2022年、v+255+27頁

菊田 悠

本書は、帯谷知可氏が2019年3月に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士論文「中央アジアにおけるモダニティの追求——ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール問題の歴史的展開と現代——」を基にした単著である。まずはその問題意識と、理論的意義を見てみよう。

本書の冒頭で述べられている通り、ソヴィエト連邦時代に科学的無神論の下で世俗化政策が行われたウズベキスタンでは、20世紀後半になるとイスラーム・ヴェールと見なされるような全身を布で覆う服装は、特に都市部ではほとんど見られなくなっていた。ところが、ソ連解体後、人口の大半を占めるムスリムの中で民族の伝統やイスラームが再評価されていくなかで、イスラーム的な装いをする女性が目に見えて増加した。ソ連的な国家による宗教の管理体制を継承し、イスラーム過激主義の広がりを恐れたカリモフ政権は、頭髮の一部を薄いスカーフで軽く覆う程度の装いは取り締まらなかったが、目以外の全身を布で隠すような服装は規制していった。1991年のウズベキスタンへの初渡航以来、このようなイスラーム・ヴェールの広がりや国家による制限を目の当たりにしてきた筆者は「この地域ではヴェールをめぐる議論に常に目指すべき近代的な生活や社会のあり方、モダニティの在り方が象徴され、反映されてきた」(p. 2)と看破し、「ロシア帝国期、社会主義のもとでのソヴィエト期、さらに独立国となったポスト社会主義期を通じて、女性がヴェールを着用しない社会の構築(あるいはそのような社会への改造)を理想として追求されてきたモダニティのあり方の批判的検討を行い、ソ連解体後のグローバル化を経て、多元化へと向かう現代世界の中で、今あらためてウズベキスタンにとって21世紀的なモダニティはありうるのか、あるとすればそれはどのようなものを問うてみたい」(同上)と述べる。当地域における女性の社会進出や社会主義的男女平等をめぐるのは、「女性問題(zhenskii vopros)」研究としてソ連時代から一定の蓄積があるものの、「女性の社会進出を妨げているものは何か」という問題意識にとどまりがちで、他地域のジェンダー研究におけるセクシュアリティや男性性研究のような広がりには乏しい。また、ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国でのイスラーム・ヴェール根絶

キャンペーン「フジウム(hujum)」については、マッセル[Massel 1974]やノースロップ[Northrop 2004]、カンブ[Kamp 2006]らの浩瀚な歴史研究があるが、それらがポスト・ソヴィエト時代のムスリム女性の装いをつなげて論じられることも、これまでほとんどなかった。その点で、本書はまさに待望の一冊であり、歴史研究と人類学的研究およびジェンダー研究を往還しながらヴェール問題を扱うことで、旧ソ連研究とイスラーム地域研究を架橋する新境地を切り開いたものといえる。

次に、本書の内容を順に紹介していこう。序論では、「ウズベキスタンのイスラーム・ヴェール(以下ヴェール)問題の歴史のおよび現代的文脈を読み解くこと、それを通じてこの地域の19世紀後半から現在に至るまでのモダニティ追及の葛藤に満ちた軌跡をたどること」(p. 1)という本書の視座が示される。より具体的には、「ヴェールに関する植民地主義的言説は、20世紀的なモダニティの追求という観点から、ウズベキスタンの領域ではどのような歴史的展開を経てきたのか」(p. 13)という問いを設定し、現在のウズベキスタンの領域における19世紀後半以降のヴェールのかたちと着用の実態を通時的に明らかにすること、ヴェールをめぐる言説と表象に埋め込まれた本質主義的で植民地主義的な「我々／他者」「文明／野蛮」「進歩／後進」といった二項対立(ダイコトミー)の時代ごとの変容を示すこと、現代のウズベキスタンでこのような二項対立を脱構築した女性の進歩や社会のあり方について開かれた議論が展開される可能性について考察すること、という3つの課題に取り組むことが述べられる。簡潔にして要を得たこの章は、中央アジアのヴェールに関連したさまざまな分野の先行研究群の優れた整理ともなっている。

第1部「モダニティ追及の磁場としてのウズベキスタン」では、本書の背景となるウズベキスタンの成立から1991年の独立に至る経緯と、ウズベク・ナショナリズムの下での歴史の見直し、独立前後からのイスラーム復興と政権との確執が述べられている。第1章は「ウズベキスタンの成立——1924年中央アジア民族・共和国境界画定——」と題して、ソ連時代初期にいかにして現在に至る中央アジアの主要民族が定式化され、その「固有の領域」が定められたかの経緯をまとめている。中央アジアにおける民族の成立と民族間の境界画定のプロセスは、ソ連解体後に新資料の公開や発見によって活発な議論がなされてきた重要かつ複雑な対象だが、この章では最新の研究成果を参照しつつ、境界画定の主導者たちとその議論の展開を時系列で整理し、現在の国境線とは異なる当時の諸案をオルターナティブとして紹介することで、大変理解しやすい記述となっている。

続く第2章「独立後のウズベキスタンのナショナリズムの光と影」では、独立国家となったウズベキスタンがカリモフ大統領のもとでソ連時代を表面的には否定的にとらえつつも、ソ連時代に成立した民族と国家の枠組みを守るために、いかなる国家イデオロギーと歴史観を掲げてきたかを分析している。それによれば、カリモフ大統領が唱えた「民族独立理念

(milliy istiqloq go'yasi)」と、それを具現化するための文化イデオロギーたる「高邁な精神 (ma'naviyat)」と「啓蒙 (ma'rifat)」という指針は、ロシア・ソ連的なものやパン・テュルク主義、政治化したイスラームのいずれも否定し、ウズベク人の伝統的価値観を称揚し独自の近代化路線を掲げるもので、教育やメディア、青年組織などを通じて国民文化のあらゆる分野に強い方向付けを与えた。また、独立後の新しい正史づくりの過程では、ソ連史学のイデオロギー的な制約の除去が盛んになった一方で、独立国家・ウズベキスタンを正当化すべく、現ウズベキスタン領内であればウズベク人という名称が登場する以前の民族や王朝の興亡もすべてウズベク民族の歴史として描くという、ソ連時代のアフトンノスチに基づいた民族起源論が使用された。さらに、ソ連史学においては封建国家の支配者で残虐な征服者という否定的な評価が定着していたアミール・ティムールが、独立後は逆に「ウズベキスタンの偉人」として公の場で最高の評価を与えられ、タシュケントの中心部にカール・マルクス像に代わってティムールの騎馬像が置かれるに至った。このように、ウズベキスタン独立後のナショナリズムがカリモフ政権下で構築・強化されていく様子を追った本章は、筆者の1990年代からの研究が存分に活かされており、政策の概要と具体例が明確かつ説得力を持って読者に伝わってくる。

第3章では「宗教とモダニティの相剋——イスラーム観をめぐる亀裂——」という題の下に、ウズベキスタンにおける異なるイスラーム観をめぐる軋轢が提示されている。ここでは、ソ連時代と同様に厳しくイスラームの管理・監督を行なおうとする国家と、社会主義イデオロギーから解放されイスラーム復興に向かおうとする社会との間に走った亀裂はもちろんのこと、ソ連時代の科学的無神論教育に由来する為政者や都市のエリート層における宗教への無関心や嫌悪、イスラーム主義者内部の見解の違いや対立といった複数の対抗軸が解説され、カリモフ後の現シャフカト・ミルズィヨエフ大統領による「伝統的」イスラームの肯定的評価までが網羅されている。独立後ウズベキスタンのイスラームの概要を知りたい者にとって、必読の一章といえるだろう。

第2部では「イスラーム・ヴェール問題の歴史的展開」と題して、いよいよロシア帝政期からソ連期にかけての中央アジアのムスリム定住民女性の装いをめぐる言説と表象が検討される。まず、第4章では19世紀後半から20世紀初頭にかけてのロシア領トルキスタンにおけるムスリム定住民女性の服装とヴェール着用の実態について、ロシア帝国時代のロシア人による民族誌的記述を基に整理している。それによると、当時のムスリム定住民女性は、成長すると室内でも常にウラマルまたはルマルと呼ばれるスカーフで頭部を覆うようになり、外出の際はその上に分厚い長衣バランジを被り、顔は黒い馬毛ネットのチムメトまたはチムベトで覆っていた。このような服装および10代半ば前後で結婚し家の中で家事労働に勤しむ女性の姿は、植民者たるロシア人の目には後進的で抑圧されたものとして映っていたこと

も指摘される。

第5章「帝政ロシアの「ムスリム女性」と「ヴェール」をめぐる言説」では、帝政ロシアにおける「ムスリム女性問題」が概観される。具体的には、1900年代初頭にロシア帝国内のムスリム女性解放を、イスラームの否定ではなく、その教義と歴史の再評価によって主張した二人の人物——O. C. レベヂェヴァとA. アガエフの著書の論点を紹介している。そこからは、この時期のロシア帝国内のイスラーム的男女平等言説が、オスマン帝国や英領インドにおける女性解放論や改革思想とつながりを持っていたことが浮かび上がる。本章は同時に、当時タシュケントに在住したロシア人東洋学者で異族人教育の専門家でもあったN. P. オストロウモフの見解も紹介しているが、それはレベヂェヴァやアガエフらのイスラーム的男女平等論を真っ向から否定するものであった。かくして、ロシア帝国ではイスラームが男女平等の教えを有するか否かについて対立する主張が存在していたが、その双方ともトルキスタンにおける女性の隔離習慣やヴェール着用を「悪しき慣習」「野蛮な慣習」などと呼び、退廃や不道徳に結びつくものと見なしていた。その見解は、ソヴィエト体制下の公的な言説にも引き継がれていく。

第6章「ソ連期ウズベキスタンの「女性」と「ヴェール」をめぐる言説と表象」においては、まず1927年に始まった「フジュム(hujum)」と呼ばれる女性解放運動の大規模なキャンペーンが検討される。続いて当時のウズベク共和国におけるメディア等のビジュアル資料を素材として、ソ連時代のウズベク人女性とヴェールをめぐる言説と表象が分析される。そこからは、植民地主義と闘って成立したはずのソヴィエト政権下においても、公的な言説ではヴェールがロシア帝国時代と同様に後進性や抑圧の象徴として描かれていたことが明らかとなる。ただし、その根絶すべきヴェールとは、日常で頭部にまとうスカーフ(ウラマルまたはルマル、後にルモルと呼ばれる)ではなく、外出の際に被るパランジとチムマトなのであった。

第3部「現代ウズベキスタンの「ヴェールの政治学」」は、独立後のウズベキスタンであらためて出現した「イスラーム・ヴェール問題」についての分析である。第7章では、独立後の権威主義体制の下でのイスラーム過激主義の台頭が指摘される。続く第8章は、「フジュム」や根絶すべきヴェールとされたパランジが独立後の歴史と民族文化の見直しを経て、どのようにとらえられているかを、2009年から2013年にかけてのタシュケント市とサマルカンド市における22名へのインタビューから考察している。さらには世俗主義的フェミニストとして国際的にも知られるウズベク人女性のM. トフタホジャエヴァによる、「フジュム」やウズベキスタンの女性をめぐる諸問題の評価も紹介している。ここからは、トフタホジャエヴァのようなソヴィエト型の世俗主義的知識人と、よりイスラーム的な生活を志向する人々との間に、同じウズベク人であってもかなりの見解の相違があることが浮き彫りとなる。第9章では、ペレストロイカから独立後にかけて、パランジとチムマトとは異なる、ウズベ

キスタンにとって新しいスタイルのイスラーム・ヴェールが出現したことが述べられる。それは白や淡色で無地のヘッドスカーフとゆるやかで長い丈の衣服で体と髪、時には口元も隠す「ヨピンチク(yopinchik)」と呼ばれる服装で、若い女性の間で見られたという。ただしイスラーム過激主義を警戒する当局は、これを厳しく規制し、全土に広がるには至らなかった。そういえば、2002年に評者がフェルガナ州に長期滞在した際には、「数年前には「閉じた服装をすること(yopiq kiyinish)」が学校でも流行して、私も素敵だと思ってそういう格好をしていたけれど、政府が禁止したので止めた」と語る10代の少女がいた。あれはおそらく「ヨピンチク」だったのであろう。本書を読んで腑に落ちた。

次に2000年代に出現したのは「ヒジョブ(hijob)」である。これはアラビア語のヒジャーブを由来とし、未婚女性や女兒を含めた幅広い年齢層の女性があごの下でスカーフを結び、ゆったりと長い衣服でボディラインを見せない装いをするものであるが、刺繍やビーズ、柄物のスカーフなどの装飾が目立ち、スカーフと衣服が統一的にカラー・コーディネートされることも多く、「おしゃれ」で「個性的」な点がヨピンチクとは異なるという。カリモフ政権はまたしてもヒジョブに対する統制を強めたが、一方でルモルは「宗教色を含まない、民族的・伝統的なヘッドスカーフ」として公共空間でも着用することが正式に認められた。実際の外見の違いは、スカーフの結び目があごの下であるか(ヒジョブ)、頭の後ろであるか(ルモル)のわずかなものに過ぎないが、個人の選択を国家が「ヒジョブは過激主義でありルモルは民族と伝統の表れである」と一方的に評価し管理しようとする問題を指摘して、本章は閉じられる。

終章「モダニティの長い道程は再び開かれるのか」では、序章で掲げた3つの課題に対しての応答がまとめられている。さらに、2016年9月のカリモフ初代大統領の逝去後に誕生したミルズィヨエフ政権が、ヒジョブ問題に新しい展開をもたらしたことが述べられている。それは、義務教育の場では全国統一制服を導入することでヒジョブや男性のあご髭などのイスラーム的装いに加えミニスカートやタイトなジーンズなどの「西洋的」装いをも排除する一方で、町中ではヒジョブへの統制を大幅に緩和するというものである。ソ連時代にイスラームに関して植民地主義的視線やオリエンタリズムが織り込まれることになったウズベキスタンにおいて、これから女性のヴェール姿がどのように評価されていくのか。筆者は、イスラームの教えにしたがった生活や女性のヒジョブ着用が、自由や進歩と相いれないものではなく、個人の選択にゆだねられた「普通のこと」と受け止められるような価値観を社会が共有していくまでには、おそらく長い道程が待っているのだらうと予想している。以上が本書の概要である。

本書の意義は、ロシア帝国期から現代に至るまでの中央アジア定住地帯のジェンダーに関してヴェールを手掛かりとしながら日本で初めて本格的に論じ、歴史学のみならず表象研究

やジェンダー学、人類学的研究も含めた多彩な手法で対象に迫り、中東イスラーム地域などとの通地域的研究の基盤を整備したことである。その方法論は「中央アジア近現代史に軸足を置いた中央アジア地域研究の立場に立ち、文献資料研究と現地調査の有機的な結合、いわば歴史研究と現在研究の意識的な往還」(p. 14)と述べられている。これはロシア語およびウズベク語等の諸資料、さらには英語等の研究論文を駆使することに加えて、頻繁に現地を訪れ研究者や市井の人々と交流し、聞き取り調査を行なうという労苦の積み重ねであり、誰にでも可能なことではない。だが、この方法があつてこそ、本書の議論は過去から現代へ向けた広い射程と深みを同時に持つことができたのである。

本書の価値として、その出版タイミングの良さもある。本書の刊行準備が進んでいた2021年7月に、ウズベキスタンでは「1998年宗教法」が改正され、「公共空間における礼拝のための衣服の着用禁止」条項が削除されて公共空間でもヒジョブ着用が認められるようになった。本書の「あとがき」ではその経緯と、義務教育の場でのヒジョブとルモルの扱いの差についても述べられている。ヴェール政策の重要な転換点も取めることができたことは本書およびその読者にとって大変幸運であった。

このように本書の価値はゆるぎないものであるのだが、書評として批判的な注文も付けねばならないとしたら、それは「モダニティ」という概念の扱いになる。本書では「モダニティ」概念の定義が深く議論されてはいない。わずかに第一部の扉で「ここでいうモダニティとは、一般的な定義として、それを西洋的なものに限定せず、現代に見合った、人間がよりよく生きるための規範や価値観の総体」とされるのみである。だが、管見の限りでは、このようなモダニティの定義は広く普及しているとは言い難い。評者の理解では、モダニティとは「およそ17世紀以降のヨーロッパに出現して、その後ほぼ世界中に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式」[ギデンズ 1993 (1990)]であり、具体的には国民国家や産業社会、科学技術の発展、世俗主義の広がりなどを指すが、それらは世界中に広がっていく中で帝国主義や人々の生活世界への国家による介入、大規模な自然破壊等ももたらしたため、今日では必ずしも手放しで称賛できる不変の価値観とはされていない。モダニティを「人間がよりよく生きるための規範や価値観の総体」と定義することには、モダニティを西洋から「目指すべき理想」として取り入れたロシア帝国そしてその後のソ連の啓蒙主義的なモダニティ理解が反映されているのではないだろうか。あるいは、ハーバマスの「ソ連崩壊後のポスト・モダニズムが反啓蒙的で進歩や自由を否定している」と考える場合は、モダニティとは「よりよく生きるための規範」たりうるかもしれない。しかし、その場合でも、本書では「21世紀のモダニティ」という表現も用いているので、「モダニティとモダニズムはソ連崩壊によって終わった」とするポスト・モダニズムに対する評価を含めて、本書でのモダニティ定義をより明確に行うべきではなかったかと思える。

また、2009年のタシュケントにおける多様なヴェール姿を写真付きで紹介した第9章は、いかに現代ウズベキスタンの女性が个性的におしゃれを楽しんでいるかが伝わってくる本書の魅力のひとつになっているのだが、一方で彼女たちの服装選択の詳しい分析は、「より実証的な検討が望まれるところである」と今後の課題になっている。隣国キルギスに関しては、ヴェール姿を選択した若い女性の葛藤と戦略についての論考が既になされており [McBrien 2009]、このような当事者の主観に迫る分析がウズベキスタンにおいても積み上げられなければならないだろう。

かくして、この書評は最後に「ないものねだり」でお茶を濁すことになったが、それによっても本書の価値は減じられない。本書はウズベキスタンおよび中央アジア、旧ソ連地域の研究に新しい地平を切り開き、学際的な方法論および他地域研究との連携の豊かな可能性を示した一冊として高く評価されるべきものである。

## 参考文献

- ギデンズ・アンソニー 1993 (1990) 『近代とはいかなる時代か? —— モダニティの帰結 ——』、松尾精文・小幡正敏 (訳)、東京: 而立書房。
- ハーバマス・ユルゲン 2000 (1990) 『近代 —— 未完のプロジェクト ——』、三島憲一 (編訳)、東京: 岩波書店。
- Kamp, Marianne. 2006. *The New Woman in Uzbekistan: Islam, Modernity, and Unveiling under Communism*, Seattle: University of Washington Press.
- Massell, Gregory J. 1974. *The Surrogate Proletariat: Moslem Women and Revolutionary Strategies in Soviet Central Asia, 1919–1929*, Princeton: Princeton University Press.
- McBrien, Julie. 2009. “Mukadas’s Struggle: Veils and Modernity in Kyrgyzstan,” *Journal of the Royal Anthropological Institute* 15(S1), pp. 127–144.
- Northrop, Douglas. 2004. *Veiled Empire: Gender and Power in Stalinist Central Asia*, Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.

(北海学園大学経済学部)